池田自然史博物館

◆ 連 続 性 ◆

河川に棲む生き物の多様性を考える場合、河川の『連続性』という条件は重要なキーワードになります。生き物の視点に立った「河川の『連続性』が保たれている」ということは、生き物が堰や落差工といった河川の横断構造物によって遡上・降下といった回遊や移動を阻害されないこと、水門や樋門などの付帯施設で本川と支川間の自由な往来を邪魔されないことなのです。
さらに突き詰めると、支川とそれに流れ込む用水路、用水路と水田との『連続性』も必要となります。ドジョウやナマズ、コイ・フナの仲間などは、田に水が張られる田植えから梅雨の時期に、河川から用水路を通って水田に進入して産卵をし、本川に戻ります。そして、孵化した稚魚は一定期間を水田内で生活した後、本川へと旅立っていきます。つまり、河川の『連続性』は、ある魚類がその生活環の中の一時期を過ごすための重要な条件なのです。
ただし『連続性』を語るには、それだけでは充分ではありません。河川は、水中に棲む魚類や甲殻類や貝類といった底生動物だけではなく、水際や河川敷に棲む鳥類、昆虫類、小動物、さらには河川外から飛来する鳥類や昆虫類などなど、実に多種多様な生き物が利用する場所なのです。つまり、生き物のための河川の『連続性』とは、通常時に水が流れる場所（低水路）にとどまらず、低水路から陸上へと続く水際部（推移帯）、そこから高水敷、堤防そして堤内地へと向かう環境の繋がりのことを意味します。さらに視野を拡げれば、堤内地といっても、住宅地、田畑、公園、林から里山へと様々な環境が存在し、繋がっていきます。これら一連の環境の『連続性』が保たれ豊かであれば、多様な生き物が河川に集うことになる訳なのです。





◆ギンブナ



◆ナマズ



◆ドジョウ

環境省　環境カウンセラー
NPO法人　nature works

池田　哲哉

来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



7月4日、ヤギによる除草実験が始まった。初出勤の様子を見学に行ったが、草をワシワシと食べていた。名前はリーダー・ダディー・はるな・ピーター。4頭ともオスである。移動動物園よりレンタルしたそうだが、彼らは淀川河川事務所 管理課 委嘱職員である。クズも食べていたが、桜も食べる。ヤギにとってもおいしいのだろう。上田RAが「ナガエツルノゲイトウを食べるかどうか実験してほしい」と頼んでいた。その結果は実に知りたいところである。実験は9月末までの予定。この「獣機」の公務を邪魔しないよう、触ったり、エサをやったりしないでね。ティッシュなど紙を与えると、腸閉塞を起こすよ!!（編集長・石山郁慧）

川と人　人と人を結ぶ
河川レンジャー 淀川管内
VER RANGER

デザイン監修：NPO法人nature works 泉野幸彦・ありさだあきよ
イラスト監修：NPO法人nature works 小村一也
取 材 協 力 ：人を自然に近づける川いい会
発 行 支 援 ：国土交通省 淀川河川事務所

バックナンバーは、http://npo-natureworks.net/ の「無料の資料」からダウンロードできます。

淀川自然画報
2016年7月号
No.20
淀川水系の生物多様性を
見る・知る・楽しむ
生きものシグナル
YODOGAWA SHIZEN GAHO

水辺の博物誌



林道の道案内

ハンミョウ　*Cicindela japonica*

春の終わりから夏の終わり頃、淀川支流や里山の河原や林道で、人の前を１～２m飛びながら逃げるハンミョウの姿目にすることがあります。この逃げ方はまるで人に道を教えるガイドのように見えるため、別名ミチオシエ、ミチシルベとも呼ばれています。タマムシと並んで、日本ではきれいな甲虫の代名詞的存在ですが、近くで見ると大きな複眼と鋭く大きな顎をもつ俊敏な肉食昆虫であることが解ります。英語名＝tiger　beetle(タイガービートル)と言われるとおり、美しい斑紋を持つハンターなのです。ちなみに日本名の漢字「斑猫」の由来は実に様々で、定かではありません。（画 / 鎌倉朝子）

発行責任者　淀川管内河川レンジャー・石山郁慧

under the water

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史

淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

シロヒレタビラ

Acheilognathus tabira tabira



本種はコイ目コイ科タナゴ亜科タナゴ属に分類され、日本産のタナゴ類のなかでは、最も亜種の多いグループの一種です。かつて、このタビラのグループは分布や婚姻色、卵や稚魚の形態などから3亜種（シロヒレタビラ、アカヒレタビラ、セボシタビラ）に分けられていました。しかし、近年の研究で、5亜種（3亜種＋キタノアカヒレタビラ、ミナミアカヒレタビラ）に細分化されました。



婚姻色のオスは
ひときわ美しい

シロヒレタビラは、全長6～8cmに成長します。その名前のとおり、繁殖期の雄は腹ビレや尻ビレの外縁部が白色に縁取られ、その内側が黒色になります。そのコントラストが美しいのが一番の特徴といえるでしょう。また、口には1対のヒゲがみられ、体側の後方には暗色の縦条があり、肩部には暗青色の円形の斑紋がみられるのも外見の特徴です。

分布は濃尾平野、琵琶湖淀川水系、岡山県高梁川水系以東の山陽地方で、国内移入種としては青森県や島根県の生息が確認されています。生息場所は、岩礁域から砂泥底のところまで広く生息し、河川敷内の池やたまり、本流とつながった灌漑用水路に棲むほか、琵琶湖では水深30～40mの深層からも採集されたことがあります。主に石についた付着藻類を食べる雑食性で、繁殖期は4～9月。他のタナゴと同様に、淡水産の二枚貝に卵を産み付ける習性があります。琵琶湖ではタテボシ、セタイシガイ、ドブガイなどの貝に卵を産みつけることで知られていますが、岡山市内の水路ではカタハガイのみを選んで卵を産み付けています。観賞用としても非常に美しく、繁殖期のオスは一見の価値があります。

花想鳥感

四季折々、水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館　主任学芸員
高田 みちよ

ヨシ原のオオヨシキリ





◆写真提供
池田哲哉

ヨシ原に行くと、大きな声で「ギョギョシ、ギョギョシ」と鳴く鳥がいるのをご存じでしょうか。その名もオオヨシキリというこの鳥は、ヨシ原の中でも少々高いヨシや木のてっぺんに陣取って、真っ赤な口の中が丸見えになるぐらい大きく口を開けて、絶叫ともいえる大声でさえずります。

そんなに頑張ってさえずっている理由は、ナワバリ宣言とメスへのアピールです。オオヨシキリは夏鳥で、越冬地であるフィリピンなどから春先に日本に渡ってきて、ヨシ原でさかんにさえずってナワバリを確保します。早くに渡ってきたオス、とくに4月中に到着したオスは一夫多妻になる傾向が強く、遅く到着したオスではメスを獲得できないことが多いことがわかっています。一夫多妻では2～3羽のメスとつがい、第一夫人が決まるとオスはいったんさえずりをやめてメスを他のオスからガードし、メスが産卵を始めると再びさえずりはじめ、第二夫人を誘引します。オス親は、通常は一番成長の良い第一夫人のヒナに対してのみエサを運び、少しでも孵化が遅れた第二、第三夫人のヒナには餌を運びません。

こうして夏の間、ヨシ原で繁殖したオオヨシキリは秋に越冬地へと渡っていきます。このオオヨシキリが繁殖できるにはまとまったヨシ原が必要です。淀川は大阪府下のオオヨシキリの数少ない繁殖地なのです。

the waterside

the sky & land

水辺の虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

人を自然に近づける川いい会　捕獲番長 川島 大助

ミズカマキリ

ミズカマキリは、名前のとおりカマキリに似た姿をしていますが、カメムシ目タイコウチ科に分類される水生昆虫の一種です。体長は40～50mm、尾には2本の呼吸管があり、その長さは体の長さとほどあります。

日本では全国的に分布し、水田や池沼、クリークなどの水中に生息しています。肉食性で、水草や水際植物帯、枯死植物帯などに潜んで、それらに擬態し獲物を待ち伏せします。そして、カマキリのように鎌状の前肢で獲物を捕らえ、口吻を刺して消化液を送り込み、溶けた肉液を吸い、体外消化します。消化には時間がかかり、大きな獲物は15時間以上も採餌し続けることもあるようです。

また、本種は飛翔することができ、同じカメムシ目（水生昆虫）の中では最も飛翔力があるといわれています。そのため、生息範囲を拡大することができ、さらに棲んでいる場所の環境が悪くなると、より棲みよい場所へ移動することができます。近年では激減しているタガメやコオイムシに比べると、現代の環境に適応した種ともいわれています。しかしながら、ミズカマキリの生息地が減少していることから、生息数も減ってきているようです。





捕まえた時は口吻で刺されないように
注意しよう。また、虫かごに入れていないと
飛んで逃げていってしまうよ!

淀川では、ワンドやたまりで見かけることがあります。7月頃は本種の産卵期でもあり、大きく成長したミズカマキリを見つけやすい季節です。水際の植物や水草をタモ網でガサガサして採集し、水生のミズカマキリをぜひ観察してみてください！

the worst 100

侵略的外来生物

淀川ワースト100



キク科　**ミズヒマワリ**

Gymnocoronis spilanthoides



淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧

原産地は中央・南アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、台湾。多年草の注水植物。日本には戦後に熱帯魚の輸入に伴い入ってきたらしい。1995年に愛知県で発見されてから、各地に分布を広げた。淀川水系では芥川で発見されて以後、庭窪ワンドや城北ワンドでも見られる。

高さは0.5～2m。生命力が強く、短期間で水面一帯をおおってしまう。葉や茎の断片からも再生するため、駆除する際にはちぎれないように注意する必要がある。誠にやっかいな植物だ。芥川では今も駆除作業を続けているが、なかなか殲滅することができないと聴く。特定外来生物の中でも、植物が一番厄介だと感じる。



庭窪ワンドに生えていた
ミズヒマワリ

